二〇二六年度　大阪大学（文学部以外）　第3問〔問題編・改題〕

「阪大古文のみかた」の回となりました。二〇二六年の大阪大学の国語（文学部以外）の第3問を取り上げてお話をしていきたいと思います。

三　次の文章を読んで、後の問い（問一～四）に答えなさい。

（注1）荻生茂卿、『南留別志』といふ随筆あり。その説、十に六七は誤れり。土佐の谷重遠といふ人、『佐留別志』をつくりて、これを駁したりときく。『佐留別志』はいまだみず。(a)今これを弁ぜむにも、あまりはかなくて、世人もさは心得をらぬ事多ければ、かひなしとてさし置きつ。

〈中略〉

又云、「(3)『源氏物語』をみれば、病に薬用ふる事はすくなくて、大形は祈祷をのみしたるやうなり。今も田舎のものはかくの如し。鬼を尊べる風俗の弊なるべし」と有り。『延喜式』、『政事要略』などをみるに、むかしとても、病には必ず医薬をもはらにせし事なり。『源氏物語』をふとうちよみて、薬を用ふる事なしとはいひ難し。葵巻に、「『いさや、(b)聞こえまほしき事いと多かれど、まだいとたゆげに思しためれば』とて、『御ゆまゐれ』などさへあつかひ聞こえ給ふを」云々。柏木の巻に、「宮はさばかり(注7)ひはづなる御さまにて、いとむくつけう、ならはぬ事の恐ろしう思されけるに、(c)御ゆなども聞こしめさず、身の心うき事を、かかるにつけても思し入れば、さはれ、此ついでにも死なばやと思す」とある、御ゆは、薬なり。これ巻々に多かり。

そのかみは、験者のいのりにて、病の癒し事なれば、鬼を尊べる弊風俗ともいひがたし。畢竟は医といふもまじなひなり。(注8)醫といふ字の巫に従へるは、まじなひなる故なり。丹波康世の『醫鍼方』を見るに、多く『千金方』によりて、方ごとに呪文有り。令にも、典薬寮に、呪禁師、呪禁博士、呪禁生ありて、まじなひて病を療す。此の呪禁は、『唐書百官志』にも有り。皇国のみ鬼を尊ぶ弊風俗なるにはあらず。

（石原正明『年々随筆』より）

（注1）荻生茂卿　江戸時代の儒学者、荻生徂徠〔一六六六－一七二八〕。茂卿は徂徠のあざな。
（注7）ひはづなる　弱々しい。
（注8）醫　「医」の字と同じ意味の字。

問一　傍線部(a)～(c)をそれぞれ現代語訳しなさい。（a)は「これ」の指す内容を明らかにすること。

〈問二・三　略〉

問四　傍線部(3)について、著者はどのような根拠に基づいてこの説を批判しているか、(ア)「病に薬用ふる事はすくなくて」と、(イ)「鬼を尊べる風俗の弊なるべし」の二点について、それぞれ説明しなさい。

※本問題は二〇二六年度の大阪大学前期試験（文学部以外）の古文の問題から一部を抜粋しております。

二〇二六年度　大阪大学（文学部以外）　第3問（改題）　【解答解説編】

※なお本原稿における解答や解説は、大阪大学が公表したものではなく、研伸館が独自で作成したものです。

【解答】

問一

（a）　今『南留別志』を批評するような場合においても、（『佐留別志』は）あまりに取るに足らなくて、

（b）　申し上げたい事が大変多くあるが、

（c）　お薬湯なども召し上がらず、

問四

（ア）（昔の文献や、）『源氏物語』の複数の巻にそれぞれ病の治療に薬を用いる場面が見られること。

（イ）　病の治療に祈祷を用いるのは、地域的な悪習ではなく、中国でも例の見られる正統な病の治療法であったということ。

【解説】

問一

傍線部の現代語訳問題。まず品詞分解を行い、文法事項や単語をあてはめ現代語訳を作成する。

傍線部(a)について、重要な文法事項・単語は「はかなし」、婉曲の助動詞「む」。「弁ず」は現代語「弁ずる」にも通じる意味を持つので、「批評する・述べる・論じる」または「理解する・分かる」と訳すが、後ろの内容を踏まえて「批評する」で訳す方が良いだろう。ここまでの訳は、「今これを批評するような場合においても、あまりに取るに足らなくて」となる。また、「これ」の指示内容を明らかにする必要がある。傍線部直前までは、『南留別志』という、誤りの多い随筆があり、それを批判する『佐留別志』もあるようだが、まだ読んだことがない」という内容である。このことと、指示語以外の傍線部の訳を踏まえて考えると、指示内容は『南留別志』となる。

傍線部(b)について、重要な文法事項・単語は、「聞こゆ」、願望の助動詞「まほし」、「いと」、逆接確定条件の接続助詞「ど」。「聞こゆ」は「言ふ」の謙譲語として訳出する。

傍線部(c)について、重要な文法事項・単語は、「聞こしめす」、打消の助動詞「ず」。「御ゆ」は重要語句として覚えるものではなく、本文中の「御ゆは、薬なり」を参考にして訳出する。「御ゆ」が薬湯であることが分かれば、尊敬語「聞こしめす」は「召し上がる」と訳出するのが適切だと導けるだろう。

問一は、(a)は少し難しいが、(b)(c)は基本的な問題であった。大阪大学(文学部以外)の受験を検討している生徒の皆さんは、単語帳や文法書などを用いて、暗記を丁寧に定着させていこう。

次ページにつづく

問四

（ア）について、「病に薬用ふる事はすくなくて（＝病気に薬を使うことは少なくて）」ということに対する、著者の批判の根拠を解答にする。傍線（3）を含む段落が解答根拠となる。特に『源氏物語』をふとうちよみて～これ巻々に多かり」の箇所は、『源氏物語』で病気に薬を使う場面が多くある」という著者の批判が読み取れる。ちなみに、同段落にある『延喜式』、『政事要略』は、共に平安時代成立の文献であるので、それを併せて解答に入れても良い。

（イ）について、「鬼を尊べる風俗の弊なるべし（＝鬼を尊ぶ習わしの弊害であるにちがいない）」という事に対する、著者の批判の根拠を解答にする。傍線（3）を含む段落の、次の段落が解答根拠となる。著者は、病の治療に祈祷を用いるのは地域的な悪習ではないと批判しているのである。その根拠は、「丹波康世の『醫鍼方』を見るに～此の呪禁は、『唐書百官志』にも有り」という箇所に書かれている。「醫」の字や、丹波康世著『醫鍼方』、典薬寮（律令制下の官司のひとつ）といった、医療にまつわる字・資料・役所は、それぞれまじないと関連がある。ここから「まじないは公的な治療法だった」、という批判が読み取れる。また、『醫鍼方』の呪文や典薬寮の呪禁といった日本のまじないは、『千金方』や『唐書百官志』といった中国の文献にもそれぞれ記載がある。ここから「日本だけでなく中国でも、まじないを公的な医療として使っていた」という批判が読み取れる。以上から、祈祷は地域的な悪習ではない＝正統な治療法である、という主旨の解答が導き出せよう。

問四は、設問条件に従い、本文中から必要な情報を的確に取捨選択し、簡潔に記述する力が必要であった。やはり日頃の練習が欠かせない。また、難解な単語が無い分、読みやすい文章ではあるが、「験者」「呪禁」といった、病気・呪術関連の古文常識を知っている方が、内容は把握しやすいだろう。大阪大学（文学部以外）の受験を検討している生徒の皆さんは、古文の学習の際に、古文常識を蓄えていくこともお忘れなく。